

## 桜をみたら思い出してほしい話

1年生131名、2年生161名の代表者に、先ほど修了証を手渡しました。修了証の「しゅう」という字は「終わる」という字ではありません。修学旅行の「修」です。この字は「おさめる」と読み、「身に付ける」という意味があります。ですから修了式とは、この1年間を通じて学習面でも生活面でも様々なことを身に付け、「私たちの成長した姿を見てください」という式なのだと考えています。皆さんはこの1年間で成長することができたでしょうか。各学年等の主任の先生に、皆さんが集団として成長した点を聞いてみました。789組主任の金室先生は「やりたくなくても、やらなければいけないことは最後までできるようになった」、1年生の山田先生は「係の仕事や清掃を責任をもってやるようになった」、2年生の細田先生は「授業の話し合い活動などで、人の意見に耳を傾け、聴くことができるようになった」とお話になりました。すばらしい成長だと思います。

修了式にあたり、詩人の大岡信さんのエッセイ「言葉の力」（光村図書 中学校国語教科書収録）を取り上げたいと考えています。染織家（着物の生地を、植物などの自然の材料で染める人）志村ふくみさんの職場を訪れた大岡さんは、美しい桜色に染まった糸で織った着物を見せてもらいました。大岡さんは、「桜の花びら」を煮詰めて、その美しい色を取り出したのだと思ったそうです。それはそうです。私も絶対にそう思います。でもそうではない、では、一体何を煮詰めたのでしょうか？答えは「桜の木の皮」なのだそうです。桜の木の皮を皆さんも見たことがあるでしょう。黒っぽいごつごつした皮を煮詰めて、美しい桜色が取れるなんて想像もできません。志村さんはさらにこんなことを教えてくれました。「この桜色は、一年中どの季節でもとれるわけではない。桜の花が咲く直前のころ、山の桜の皮をもらってきて染めると、こんな、上気したような、えもいわれぬ色を取り出せるのだ。」このお話を聞いた大岡さんは考えました。「花びらのピンクは、幹のピンクであり、樹皮のピンクであり、樹液のピンクであった。桜は全身で春のピンクに色づいていて、花びらはいわばそれらのピンクが、ほんの先端だけ姿を出したものにすぎなかった。」その上で、大岡さんはエッセイの中で「桜の花びら一枚一枚」と、人が発する「言葉の一語一語」と重ね合わせていました。私は、そのエッセイを読み終え、私たちが発する言葉には、その人の考え方や心のもち方など、全てが反映しているのだという思いを強くしました。口先だけでごまかすことはできない、とつくづく思いました。それは言葉にだけ当てはまるわけではないと思います。行動も同じ、表情も同じ…と考えを広げていくこともできます。皆さんがすべきことは、見えるところだけを飾り立てること、取り繕うことなんかではありません。考え方や心のもち方など、人間そのものを豊かにすることなのだと思います。

今、校庭の桜が花が開き始めます。三尻中学校の桜は本当に美しいです。見事です。桜の花をみると、このお話を思い出してもらえたらうれしいです。春休み、そのあと始まる令和6年度での、皆さんのさらなる成長に期待し、令和5年度修了式の式辞とします。